

【イエス様に従うという生き方】

9:57 一行が道を進んで行くと、イエスに対して、

「あなたがおいでになる所なら、どこへでも従って参ります」と言う人がいた。

9:58 イエスは言われた。「狐には穴があり、空の鳥には巣がある。

だが、人の子には枕する所もない。」

9:59 そして別の人に、「わたしに従いなさい」と言われたが、

その人は、「主よ、まず、父を葬りに行かせてください」と言った。

9:60 イエスは言われた。「死んでいる者たちに、自分たちの死者を葬らせなさい。

あなたは行って、神の国を言い広めなさい。」

9:61 また、別の人も言った。「主よ、あなたに従います。

しかし、まず家族にいとまごいに行かせてください。」

9:62 イエスはその人に、「鋤に手をかけてから後ろを顧みる者は、

神の国にふさわしくない」と言われた。

イエス様の弟子になろうとして意思を表明した人たちに対してのイエス様の答えが書かれています。

これらのことを言われた人たちがイエス様に従うのをやめたのか、それともついて行ったのか結論はでていませんが、前に書かれていた「自分を捨てて従う」という内容を別の角度から語ったものと考えられるでしょう。

でも、わたしは敢えて、これらの言葉をイエス様が愛を込めてあなたに語ったとしたらどう応答しますかという角度からお話したいと思います。

1)

9:58 イエスは言われた。「狐には穴があり、空の鳥には巣がある。

だが、人の子には枕する所もない。」

これはイエス様の生活状態を語った言葉であり、イエス様に従っていく人も同じような状況になる可能性があることを示唆しています。

「それでもいいです」とか「それでも従います」という答えは既婚者からはでてこないかもしれません。

でも、ここでは、そういう問いかけなのではないでしょうか？

この言葉をイエス様が愛を込めてあなたに語っておられるとしたら、どういうふうにつたわってくるでしょう。どんな印象が残るでしょう。

貧しさは予測できます。でも、何が何でも、貧しくなることを承知で従ってきなさい、という意味にはならないのではないかと思います。

ある人は、そういう決断をするでしょう。お金などなくても貧乏になっても従いますという人はいると思います。

でもついていけるのはそういう人だけでしょうか。

「わかりました。イエス様からの手当は求めません。自分の生活は自分で働いて稼いで、イエス様に着いていきます」という人もいるでしょう。

イエスさまは、そういう従い方も喜ばれると思います。

その際、イエス様にこんなに犠牲を払って従っているのに報いが少ないと文句は言わないことが重要でしょうね。喜んで従うことです。

2) 死者のためではなく、生きている人にこそ神の国を

次の人の場合「主よ、まず、父を葬りに行かせてください」と言った。」と書かれています。それに対して

9:60 イエスは言われた。「死んでいる者たちに、自分たちの死者を葬らせなさい。

あなたは行って、神の国を言い広めなさい。」

と答えています。

自分の父親の葬儀を軽視して良いということではないでしょう。

亡くなった人はすでに、誰の心配からも解放されています。

死んだ人のことは、もう心配しても始まらないので、それは神さまにおまかせして、遺族への慰めの言葉を語り、あるいは、黙って遺族の悲しみに寄り添い、神がきっとこの状況を取り仕切ってくださるから悩みすぎないように、疲れすぎないようにしてくださいと慰めを伝えること、それが神の国を語ることにつながります。

どこに行くにしても「生きている人たちに神の慰めや励ましを、あなたの存在で分かち合えれば神の国を語っていることにつながります。

「語る」とありますが、これは必ずしも説教することではなく、「行動で示す」こともふくまれているでしょう。悲しんでいる人たちのところにしずかに同伴し連帯する。それが基本かもしれません。

3) 人からの理解ではなく主体的な服従

次の人は

9:61 また、別の人も言った。「主よ、あなたに従います。

しかし、まず家族にいとまごいに行かせてください。」

9:62 イエスはその人に、「鋤に手をかけてから後ろを顧みる者は、神の国にふさわしくない」と言われた。

というふうで紹介されています。

これは条件つきでイエス様に従おうとしているように見えます。

まず、あの人からの許可をもらってから神さま、あなたに従いますという感じです。

あるいは「人への相談」「人からの評価」を受けてから、神さまの促しに従うという姿勢でもあります。

神に従うというのであれば、イエス様に聞きながら、聖書の言葉に気付かされながら前に進むことが求められているのです。

単なる人の知恵とか、仲間からの作戦によって決断するのではなく、聖書からの気づきを大事に、イエスさまの言葉からの促しを大事に決断していくようにという勧めでしょう。

主体的に、途中で人からの意見に依存しすぎないで、自律的にイエス様と対話しながら、イエス様についていく姿勢を保持しながら前向きに生きなさいという勧めだと思います。

「イエス様に従っていて良いのか、どうか、家族と相談する、友だちに相談する」という姿勢ではなく、イエス様としっかり関わりを密にして、一日一日、イエス様と共に生きることが大事です。

その際、どのように着いていくか、何をしながらついていくのか、個人個人がみな別な行動、別な方向を示されることがあるでしょう。

それは心配せず、あなたはあなたの道を進めばよいのです。

役割はみな違います。促しも個人個人みんな違います。

違ってよいのです。

しかし、この道は「狭い道」です。自分とイエス様との間で決めなければならないからです。

イエス様からのさまざまな促しにしっかり応える生き方だからです。

誤解され、困難や貧困を経験し、冷たい人と呼ばれ、ときに親不孝と呼ばれ、友だち甲斐のない人と呼ばれることもあるかもしれません。

でも、イエス様は私達が恥をかき、人から軽蔑されることを願ってはいません。

従う人全員が貧しくなり、世間を捨てて生きることを神さまは望んではおられないと思います。むしろ、その中でこそ、生き生きと生きることで神の国を語ることにつながるのです。

*生きるを選び、自活のために働くことも大事なことでうなづくこと。

キリストに従うとは、仕事を辞めることを意味しないというケースがあることを認めること

* 「死んだ人」「死んだもの」を相手にするのではなく「生きている存在」にむかって「神の取り仕切りのあること」を分かち合うこと。

*そして、自分とイエス様との出会いの中で、神の言葉である聖書の促しから気づきを受けつつ、自らの道をしっかり進むこと。誰のせいにもせずに、自らの確信を土台に前に進むことが求められています。

「神さま、あなたのお心のままに、自由にお用いください。わたしは自発的、自主的にあなたについていきます」という心で従い、人に触れ、社会で生きること。

結果については神さまにおまかせして黙々と役割を果たすこと。

「受けるよりは与えること」の中に祝福があることを信じて生きること。

それぞれが、神さまの促しに忠実に応えていくなら、全年齢層に、どんな文化の人にも「神の愛」が届けられ心が神さまに向けられ、互いに愛し合うことが教えとしてだけでなく「出来事」として実現するのだと思います。この選択肢は「牧師になる」ことだけが道ではありません。どんな職業であれ、どんな社会の位置づけのなかによいと、神の愛を受けながら自律的に生きる。

「神に従って生きる」人の「生きざま」の中に見えてくるのだと思います。

わたしなど、まだまだだなぁと実感しています。

パウロはこう書きました。

コリントの信徒への手紙第二 4章です。

4:7 ところで、わたしたちは、このような宝を土の器に納めています。この並外れて偉大な力が神のものであって、わたしたちから出たものでないことが明らかになるために。

4:8 わたしたちは、四方から苦しめられても行き詰まらず、途方に暮れても失望せず、

4:9 虐げられても見捨てられず、打ち倒されても滅ぼされない。

4:10 わたしたちは、いつもイエスの死を体にまもっています、イエスの命がこの体に現れるために。

4:11 わたしたちは生きている間、絶えずイエスのために死にさらされています、死ぬはずのこの身にイエスの命が現れるために。

**

MACF 礼拝映像はこちらです。

<https://youtu.be/x0ROlqb6XUY>